帝京科学大学紀要 Vol.10（2014）pp.1-14

小林 毅と日本のインタープリテーション

[1*]古瀬浩史 [2]林 浩二 [3]萩原裕作
[4]川嶋 直 [5]森 恭一

[1]株式会社自然教育研究センター [2]千葉県立中央博物館 [3]岐阜県立森林文化アカデミー
[4]公益財団法人キープ協会 [5]帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

[1]Koji FURUSE [2]Kozi HAYASI [3]Yusaku HAGIWARA
[4]Tadashi KAWASHIMA [5]Kyoichi MORI

Professor Takeshi KOBAYASHI with a brief history of interpretation in Japan

Abstract：Professor Takeshi Kobayashi was a leading and representative figure in interpretation of Japan. He passed away suddenly on March 13th in 2013 at the age of 55. This paper describes a brief history of interpretation in Japan, following the steps that Professor Kobayashi had taken in the field of interpretation and environmental education. Professor Kobayashi started his interpretation career at the Takao Visitor Center as a ranger of the Nature Conservation Society of Japan in 1983. He established the Center for Environmental Studies in order to focus on nature interpretation in 1988. He had also coordinated the Japan-U.S. Interpreter Training Seminar, which was jointly supported by the U.S. National Park Services, since 1995 and developed a number of other interpreter training programs in Japan. He played a central role in those training courses in 1990s and 2000s of Japan, during which the Ministry of the Environment and the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology were active in offering training for interpreters and outdoor educators. He became a professor at the Gifu Academy of Forest Science and Culture in 2005 and a professor at the Department of Animal Sciences, the Faculty of Life and Environmental Sciences, Teikyo University of Science in 2010. He developed courses for instructors and trainers of environmental education and interpretation. Professor Kobayashi helped offering opportunities for domestic and international interpreters to meet and to develop network. He had been engaged in developing interpretation through projects and events, human resource development, and networking, and greatly contributed to the enhancement of interpretation in Japan till the last day.

Key word：インタープリテーション 自然教育 環境教育[1]

はじめに

インタープリテーション：インタープリテーションには「解釈」「説明」「通訳」「演出」などの意味があるが、環境教育分野では「解説」という意味で使われている。インタープリターも一般的には「通訳者」であるが、環境教育では「解説者」を指す。インタープリテーションでは単なる情報の伝達・説明ではなく、情報の背後にある意味を理解し、何を伝えることに意味があるかという教育的なねらいを明確にした上で、背景や価値観が異なる聞き手が理解できるような伝え方をすることが重要である。[1)]

2013年7月6日に発行された『環境教育辞典』（日本環境教育学会編）には、環境や環境教育に関する830項目が掲載されており「インタープリテーション」の項目は上記のように記述されている。この項目を執筆した1957年生まれの小林 毅氏（以下、敬称略）は、名実ともに日本のインタープリテーションを語るにふさわしい人物であったが、この辞典が発行される前の2013年3月13日に55歳で急逝された。

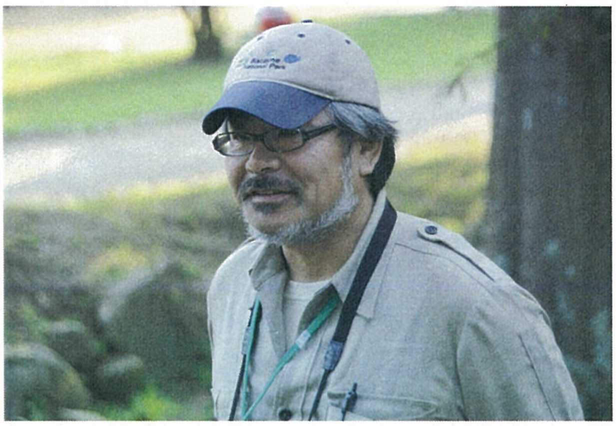

図 1. 2011年 西村仁志撮影
インタープリター・トレーニング・セミナーにて。

* 現所属：帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

小林は、1980年代に日本でインタープリターというプロフェッショナルな活動が始まった当初からのインタープリテーション実践者で、その後は指導者としても活躍、日本のインタープリテーションの父とも称されていた。その行動力は驚異的で、行動範囲は日本国内にとどまらず、アメリカ、アジアをはじめ、世界各地におよんだ。穏やかで親しみのある風貌で、キャンプや観察会で引率した子供たちから、各地で開催されたインタープリテーション講習の受講生、環境教育活動の協働者や同業者、行政関係者まで、多くの人たちに慕われていた。

小林の足跡が日本のインタープリテーションや野外活動における環境教育のこれまでのあゆみの一端を示すことから、本稿では、その足跡を経時的にふりかえるとともに、日本のインタープリテーション史の一断面を示すことを目的とした。執筆にあたっては、小林の各時代の所属先同僚を僭越ながら代表させていただくこととして、財団法人自然保護協会時代を林 浩二、株式会社自然教育研究センター時代を古瀬浩史、岐阜県立森林文化アカデミー時代を萩原裕作、帝京科学大学時代を森 恭一が、所属の域を超えたネットワークづくりの活動については川嶋 直が担当した。広範にわたる小林の功績をふりかえるのは容易ではないが、その精神が引き継がれていく一助に本稿がなれば幸いである。

日本自然保護協会時代：
日本におけるインタープリテーションの創生

■動物や自然保護に関わる活動の開始

高校時代はサッカーに明け暮れていたことは、本人がよく話をしていた。一転して、茨城大学農学部畜産学科に進学し、家畜の行動学を専攻した。在学中の1979年には、上野動物園の解説ボランティア、通称ズーボランティアの5期生として活動を始めたことが東京都動物園ボランティアーズのニュースレターの記録に残っている。これがインタープリテーションに関わる専門分野としての最初の履歴事項と思われる[2)]。

大型野生動物の観察から保護活動に関わりを持ち始め、その延長として野生生物や野鳥、自然保護にかかわるNGOの活動に関心をもつようになったのだろう。財団法人鳥類保護連盟（1947年3月設立：現在の公益財団法人鳥類保護連盟）、世界野生生物基金日本委員会（1971年9月設立：現在の公益財団法人世界自然保護基金ジャパン；WWFジャパン）、財団法人日本自然保護協会（1949年「尾瀬保存期成同盟」として設立：現在の公益財団法人日本自然保護協会）などに何らかの形で参加していたと思われる。

小林が日本自然保護協会の会員になったのは在学中の1980年のことである[3)]。北海道斜里町、知床半島の開拓地跡を日本初のナショナル・トラスト運動で守ろうとする「知床100平方メートル運動」が1977年にスタートしており、日本自然保護協会はこの運動の関東支部を担うとともに、「第1回知床自然教室」を1980年に開催した。この年と翌年の夏、小林は知床自然教室にボランティアリーダーとして参加した。それ以降、子どもを対象にした長期の自然体験キャンプの実施は小林のライフワークの一つとなり、根室市で行われた「ニムオロ自然教室」（1986年～2003年に参加）、八丈島で開催された「くろしお自然教室」（2006年～2012年）等、生涯に渡って継続した。

日本自然保護協会では、自然観察を通じて自然を守る仲間をふやそうと、自然観察指導員制度を1978年に創設し、第1回の自然観察指導員養成講習会を1978年7月に神奈川県で開催した。小林は1981年6月に日光湯元で開催された第22回自然観察指導員講習会に参加し、指導員番号1084で登録された[4)]。

■自然公園施設におけるインタープリテーションの始まり

このころ、日本野鳥の会（1934年「日本野鳥之会」として設立：現在の公益財団法人日本野鳥の会）と日本自然保護協会では、自然観察の拠点づくりの動きが形になりつつあった。日本野鳥の会では最初のネイチャーセンターを北海道苫小牧市のウトナイ湖に建設することを1979年5月に決定し、1980年2月に起工、1981年5月10日にオープンした[5)]。そこに初代のレンジャーとして派遣されたのが安西英明（現：主席研究員）である[6)]。その後も全国各地にサンクチュアリを設置したり、レンジャーを派遣していった。

明治の森高尾国定公園の高尾山頂（東京都八王子市）には1968年に初代のビジターセンターが開設されたが、1978年に落雷のため焼失してしまった。東京都はビジターセンターを再建し、1982年6月1日に現ビジターセンターがオープンした。オープンと同時に日本自然保護協会から解説員として派遣されたのが吉田正人（現：筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）である。

小林は1983年4月1日付けで日本自然保護協会の嘱託研究員となり、この東京都高尾ビジターセンターに派遣され、自然公園のビジターセンターなどネイチャーセンターでの勤務が始まった。1984年4月1日付けで研究員として正式採用された[7)]。

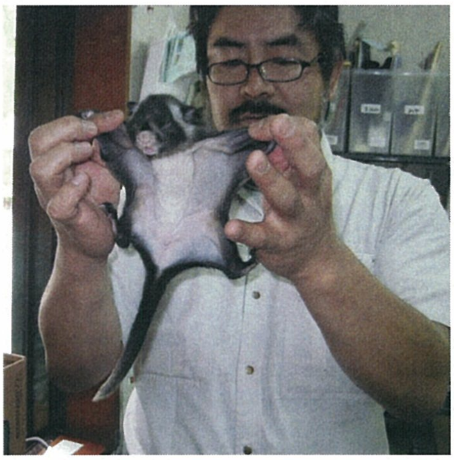

図 2.　2004 年　石井恵子撮影
保護されたムササビを持つ。
山のふるさと村ビジターセンターにて。

図 3.　2004 年　撮影者不明
日米インタープリターセミナー（ハワイ島）にて。

日本自然保護協会による東京都の自然公園施設への解説員の派遣箇所はこの後増加し、1985 年に御岳インフォメーションセンター（JR 青梅線御嶽駅前）、1988 年には奥多摩ビジターセンター（奥多摩町氷川）へと広がっていった。

当時、現場に派遣された職員は現地施設での解説や案内、展示制作、行事の企画・実施、スライドなど教材制作などの事業に従事するかたわら、いくつもの業務に取り組んでいた。その一つは、都内自然公園以外の自然観察施設の企画設計やそのための調査であり、小林が直接に関わったものに、

・山形県立自然博物園（調査、ネイチャーセンター・展示・ネイチャートレールなどの基本構想・基本計画・基本設計等）
・仙台市太白山自然観察の森（調査、ネイチャーセンター・展示・ネイチャートレールなどの基本構想・基本計画・基本設計等）

などがある[2)]。

ボランティアのコーディネートも重要な業務の一つで、ネイチャーセンター等での通年の活動に加えて、夏季に全国各地の国立公園でサブレンジャーと呼ばれるボランティアによる解説活動のための募集･研修･現地コーディネートなどの業務も担当した。更に 1970 年から 1980 年ころ、特別天然記念物ニホンカモシカによる植栽木への食害が問題となっており、カモシカの保護運動への取り組みがなされたが、小林は日本自然保護協会内でも中心的に活動した一人だった。

1980 年代前半、内部での勉強会で、自然保護教育から環境教育へと認識･位置づけが変わりつつあった。日本自然保護協会内部では組織の改廃が繰り返され、職員の出入りも少なくなかった。小林は、後の自然教育研究センター設立に向けて、記録によれば 1988 年 7 月 28 日付けで日本自然保護協会を退職している。

前述の吉田の他、同時代に日本自然保護協会でインタープリテーションに取り組み、今に至っているのは、税所功一（現：自然教育研究センター代表取締役）、古瀬浩史（現：自然教育研究センター取締役）、林 浩二（現:千葉県立中央博物館）、森 美文（森環境教育事務所）らである。

自然教育研究センター時代：インタープリテーションの普及と向上

■自然教育研究センターの設立

日本自然保護協会を退職した小林は、1989 年に自然教育、インタープリテーションに特化した専門団体である自然教育研究センターを設立した[8)]。当時、清里環境教育フォーラムの開始(1987 年に清里フォーラムとして開始、第 2 回から改称）や日本環境教育学会の設立(1990 年）などがあり､「環境教育」のキーワードが注目を集めるようになっていた。しかし小林はあえて「環境教育」ではなく「自然教育」の名称を団体名に採用した。これは、野生生物などの自然そのものや、自然体験の重要性に対する小林の強いこだわりが影響していると推察される。

自然教育研究センターは翌年、1990 年に株式会社に組織変更し、本格的にインタープリテーションに関わる業務を開始する。最初の代表者には遅れて自然保護協会を退職した木内正敏が就任した（小林は 2004 年に代表取締役に就任）。設立当初の業務としては、東京都のビジターセンターにおける解説担当職員のオン・ザ・ジョブ・トレーニングがあった。

この当時、自然公園施設の運営経験のなかった東京都の外郭団体が奥多摩ビジターセンターや新設された小峰ビジターセンターの解説業務を担当するようになったため、業務の立ち上げに際し、自然教育研究センターが職員を配置し、日常的な解説業務と平行して職員研修を行った。

1991年には、東京都奥多摩湖畔に新設された自然公園施設である山のふるさと村ビジターセンターにおける解説業務を受託し、インタープリテーション活動に広範に取り組む機会を得た。自然教育研究センターは、それ以降、足立区都市農業公園自然環境館、八丈ビジターセンター、高尾ビジターセンターなど、多くの自然公園施設の解説業務を手がけていくことになる。

■インタープリテーションの概念の紹介

日本の自然公園において、ビジターセンターの整備は1960年代中盤から始まっている（日光、尾瀬など）[9]。しかし当初、日本のビジターセンターはインタープリテーションの中心拠点としては機能しておらず[9]、「博物展示」が主な位置づけであった。日本において自然公園施設にインタープリテーションを担当する専門職員が常駐するようになった事例としては、前述のように1981年の日本野鳥の会によるウトナイ湖サンクチュアリへのレンジャーの配置、1982年に東京都が日本自然保護協会に委託して東京都高尾ビジターセンターに解説員を配置した事例が最も初期のものとして挙げられる。1991年には環境庁自然保護局（当時）に「自然ふれあい推進室」が設置された。このころから自然公園施設等に職員が常駐するケースが徐々に増えていった。1990年代は、日本の自然公園拠点において、インタープリテーションの概念や取り組み事例が普及していく時期であったと考えられる。この時期のインタープリテーションは、モデル的な前例となる拠点があったわけではなく、それぞれの拠点がお互いに影響し合いながら手探りに近い状態で運営していた。

自然教育研究センターを設立する前後、小林は、米国の国立公園を始めとする海外を積極的に訪れている。当時、海外の自然公園におけるインタープリテーションや環境教育の情報は非常に乏しく、専門誌等に断片的に紹介される程度であった。小林は、インタープリテーションの業務を高度に展開していくために海外から有益な情報を集めようと思っていたと想像される。小林はプライベートで訪れた米国グランドキャニオン国立公園のレンジャー・トレーニング・センターにおいて、日本人向けの研修会の実施の相談を持ちかけ、後にそれが日米インタープリター研修会として実現した。

小林がマネージメントを行っていた東京都山のふるさと村などのビジターセンターでは、独自のアイデアや米国国立公園から学んだインタープリテーション手法の実践により、国内の自然公園施設のモデルとなる先進的な事例を積みあげていった。

■インタープリターのトレーニング

1991年、環境庁（当時）は全国の自然ふれあい施設で自然解説等を担当する人材の能力向上や資格認定を想定した委員会を設置し、インタープリターの養成について検討を開始した。この委員会で中心的な役割を果たした財団法人キープ協会の川嶋は、野外教育や環境教育の実践に取り組んでいた様々な団体や個人を幅広く委員会に招聘し、当時としては珍しい実践者によるワークショップ形式の委員会運営が行われた。日本自然保護協会、日本野鳥の会などの環境NGO, 早くから自然学校を立ち上げて環境教育の活動に取り組んでいたキープ協会、国際自然大学校、ホールアース自然学校、体験学習法に基づく教育の専門家の西田真哉（聖マーガレット生涯教育研究所）などがこれに参加した。自然教育研究センターからは小林と古瀬が参画した。

当初想定されていた認定事業は実施されなかったが、研修事業は1992年度より「自然解説指導者研修会」として開催され、2008年まで継続された[10]。この研修会の講師は、西田、川嶋、若林正浩（キープ協会）、増田直広（キープ協会）、小林、古瀬などが務めた。これらの委員会や研修会は、日本におけるインタープリテーションの現状の把握・共有、概念や手法の普及に大きく貢献したと考えられる。

環境庁の研修会が始まった1992年、自然教育研究センターも東京都奥多摩町において第1回インタープリター・トレーニング・セミナーを開始した。このセミナーは1995年より日本インタープリテーション協会（後述）と自然教育研究センターの共催となり、2014年1月の時点で56回開催され現在も継続している。キープ協会環境教育事業部では1980年代半ばから指導者養成事業を開始し、1992年第1回インタープリターズキャンプを実施。現在まで回を重ねている。

1992年に始まったインタープリテーションに関するこれら3つのセミナーは、日本でのインタープリターの人材育成に大きな役割を果たしたと言えるだろう。

また文部省（当時）は1997年から5年間、「野外教育企画担当者セミナー」を実施した。小林はこの研修にも講師として参加した。1990年代後半から2000年代にかけては、これら以外にも全国各地の施設や公園等において、インタープリテーションや環境教育、野外教育の指導者養成事業が広く行われた。小林は東奔西走し、数多くの研修会で講師役を担当した。

■日本インタープリテーション協会と 日米インタープリター研修会

米国国立公園局は、米国内に数箇所のレンジャー・トレーニング・センターを持っている。小林は1990年頃、その一つであるグランドキャニオン国立公園のオルブライト・トレーニング・センターを訪れ、日本人向けのインタープリテーションの研修会の開催についての相談を持ちかけた。その後、担当者の異動などの困難な状況があったが、諦めずに交渉した結果、1995年にグランドキャニオン国立公園において第1回の日米インタープリター研修会が開催された[11]。この時の参加者には、岐阜県立森林文化アカデミーの萩原裕作、自然教育研究センター特別研究員の田畑伊織、古瀬などがいた。この研修会は、米国国立公園のインタープリテーションの専門家から直接レクチャーを受ける（通訳を交えて）画期的なもので、2013年まで開催地を変えながら継続している。

第1回の研修会でコーディネイターを努めたマイア・ブラウニング（当時オルブライト・トレーニング・センター、トレーニング主任）は、第2回以降に、ワシントンDCの内務省国立公園局本部でトレーニングに関するセクションの責任者であったジョン・タイラー、日系人として初めて国立公園長を務めた国立公園局OBのジェリー・シモダをスタッフに招いた。これらのスタッフとの間には回を重ねるごとに相互理解が進み、研修内容も充実していった。毎回、異なるテーマが設定され、後述する「ティーチャーズガイド」や、「包括的なインタープリテーション計画」など、インタープリテーションに関する様々な概念や手法を日本に紹介する機会となった。日米研修は小林のインタープリテーション分野での業績としてもっとも重要なものの一つと言えるだろう。日米インタープリター研修会は、自然教育研究センターの研修事業として始まったが、後に非営利の実施主体として日本インタープリテーション協会の主催に変更され現在に至っている。

小林は1988年からネイチャーセンター研究会、1990年からインタープリテーション研究会を立ち上げて運営していた。これらは少規模の研究会であったが、当時先駆的にインタープリテーションに取り組んでいた人が参加し、会報誌の発行や、環境教育に関する学会やフォーラムで研究集会を開催するなどの活動を行っていた。この時のメンバーには、林、日本野鳥の会の川村研治（当時）などがいた。1995年にこの二つの研究会を統合する形で日本インタープリテーション協会が設立された。同協会で小林が主導した主な事業として、日米インタープリター研修会の他、インタープリター・トレーニング・セミナー（自然教育研究センターと共催）、インタープリターズ・フォーラムの開催（1997～2006年）などがある。

小林は、日本インタープリテーション協会を法人化し、日本におけるインタープリテーションの普及や向上を担う団体とすることを構想していたが、この構想は道半ばとなった。

■資料化、ティーチャーズガイド等

小林は、優れたインタープリターでありトレーナーであると共に、非常に広い視野でインタープリテーションや環境教育の普及を考えていた。その一つに「資料化」の視点がある。自然教育研究センターの主な業務は行政等からの受託業務であり、それらでは多くの場合報告書が作成された。一般に事業の報告書は、業務報告に必要十分な情報をまとめて作られるものであり、必ずしも資料的な価値は高くない。しかし小林が手がけた事業報告書の多くは、新しいアイデアや有益な情報整理が組み込まれており、資料価値が非常に高いものであった。

例えば、東京都山のふるさと村の年次報告書では、各年の活動内容をコンパクトにまとめた上で、毎回異なるテーマでインタープリテーションに関する資料化が行われていた。平成11年および平成12年の山のふるさと村ビジターセンター環境教育活動報告書では、「ティーチャーズガイド」が特集されている[12]。「ティーチャーズガイド」（あるいは「カリキュラムガイド」）は公園における学校等の教育的な利用を活発化させる目的で作成される印刷物で、公園ごとにインタープリテーションのメディアとして制作される。米国の国立公園では1990年代に普及した[13]。日米インタープリター研修会でティーチャーズガイドのコンセプトを知った小林は、いち早く山のふるさと村ビジターセンターの業務報告書の中でそれを実現させた。以降これをきっかけに、ティーチャーズガイドは様々な地域で取り組まれるようになった。国営みちのく湖畔公園で作成された『みちのく湖畔公園環境教育活動

ティーチャーズガイド』[14] や、高知県森林局の『高知県森林環境教育ティーチャーズガイド『センス・オブ・フォレスト』』[15] は、このような経緯の上に作成されたものである。また、小林が執筆した一般向けの書籍である『森の楽校』[16] もその延長線の仕事と言えるだろう。

図 4.　小林の著書『森の楽校』（2003 年）の表紙
（画像は（株）山と渓谷社の提供による）

山のふるさと村ビジターセンターが開館当初より関係者向けの内部報として発行している「山ふる解説員通信」の記事にも、小林の「資料化」の意識の高さがうかがえる。小林による「インタープリターの視点」という連載記事は、自然教育研究センター退職後も継続し、亡くなるまで 65 回に渡って連載された（第 1 回から第 12 回までは、奥多摩ビジターセンターの会報「あびえす」に「自然解説員の視点」のタイトルで掲載された）[17]。これらはインタープリテーションを仕事にする者にとって有益な資料になっている。

岐阜県立森林文化アカデミー時代：インタープリター育成手法の構築と新たな“つながり”の構築

■インタープリター養成スキルの模索

2005 年、岐阜県立森林文化アカデミー（2001 年開学）教授だった高田 研（現：都留文科大学教授）が、森林文化アカデミー内の 1 コースとして環境教育指導者とインタープリターの養成を目的とした「環境教育・インタープリテーション研究会」の開講を提案した。当時、インタープリテーション普及の中心人物であり、代表的なトレーナーでもあった小林を教授に迎え、2006 年からコースを開講した。

国内でのインタープリターのトレーニングセンター開設を夢見ていた小林にとって、国内初のインタープリテーション専門課程（2 年制 / 大学院レベル）での人材育成は、自身のインタープリテーションやインタープリター養成の経験、ノウハウを改めてまとめる上でも、重要な機会であったと考えられる。以来、萩原（2007 年～）と、八尾哲史（2002 年～ 2011 年。現：大阪府内の小学校教員）との 3 人体勢で、全国の拠点に若きインタープリターたちを輩出し続けた。

理論だけでなく、フィールドワークと実践現場で体験的に学ぶことを大切にしていた小林は、身近な自然の変化を定期的に観察・調査・記録することに加え、カモシカ調査や野鳥標識調査等の特殊な調査、海外遠征、そして月明かりだけを頼りに夜の森を歩いたり、河原の石だけを使って一日中遊ぶなど、若者に対してもう一度「原体験」を経験させる実習なども積極的に取り入れた。

また、インタープリテーションの実践現場としては、2008 年にオープンした美濃市道の駅「にわか茶屋」に国内初の「道の駅」内ネイチャーセンターを企画段階から関わり開設。ハンズオン展示の制作、解説業務などの全般的な運営や、同駅内で実施した放課後の子どもの居場所事業、市内の小学生を対象とした連続型自然観察講座の企画運営、自然体験キャンプの企画実施など、数多くの体験的な学びの場を創出した。

「自然を知る」「人を知る」、そして「伝え方を知る」ことの楽しさと重要性について体験的に気づかせる人材育成のスタイルは、フィールド調査やビジターセンター勤務等の数々の現場での実践を通してインタープリテーション技術を培って来た小林らしい方法であり、短中期の研修会とはまったく異なるインタープリター養成のあり方を示したものであった[18]。

■中部東海エリアのネットワークづくり

それまで関東を拠点にインタープリターのネットワークやフォーラム開催、メーリングリスト「IP メール」などのネットワークづくりを積極的に行ってきた小林は、森林文化アカデミー教授就任の翌年 2007 年、中部東海エリアにおけるインタープリターのためのネットワーク組織の必要性を感じ、萩原と共に森林文化アカデミーを拠点に「東海インタープリテーションネットワーク」を発足。以来、「小道具」「笑い」「歴史」「植物」など、テーマや開催場所を変えながら、宿泊型のスキルアップ研修会 & 交流

会を年1回開催してきた。これらの活動は、中部東海地域のインタープリターの技術向上や、異分野、異なるフィールド間の交流を生み、中部東海地域のインタープリテーションスキルの底上げと、裾野を広げる両方の結果をもたらした。

■野生動物とインタープリター

小林がインタープリターの世界に飛び込んだ理由のひとつでもある野生動物との関係は生涯続いていた。小林は1987年から北海道根室市でバンダー(標識調査員)近藤憲久の下でバンディング技術を学び、1990年10月に新潟県福島潟でバンディング講習を受講、翌1991年から環境省事業の鳥類標識調査にバンダーとして参加した。調査は途切れることなく2012年まで継続して行われ、この22年間に5都県(茨城・埼玉・東京・山梨・岐阜)で74種約1万2千羽(新放鳥数74種11,184羽、再放鳥39種1,372羽)の鳥を標識放鳥した。再放鳥の内、遠隔地からの回収が32例(北海道→茨城26、青森→茨城1、岩手→茨城2、宮城→茨城1、茨城県内1、東京→茨城1)あった(バンディング関係の情報は山階鳥類研究所の提供による)。学生時代から始めていたカモシカ調査もまた、多忙な業務の中にありながらも、そして職場が東京、岐阜、山梨と変わりながらも、それぞれの地で欠かすことなく続けられた。

自然を自分の目で見て調査し記録を残すことの重要性、野生動物と出会った瞬間の言葉にならない感動、フィールドから様々な不思議を発見する面白さ、そして自然の中にじっくり身をおく心地よさが、小林をそうさせたのだろう。また後輩インタープリターや学生をそうした調査に積極的に誘い同行させた。インタープリターが大切にして欲しいことを、体験を通して、そして小林自身のふるまいを通して、伝えたかったのかもしれない。

2006年には岐阜大学応用生物科学部の研究チームと連携し、岐阜県内におけるニホンジカとニホンカモシカとの種間関係の解明を目的とした調査を開始した[19]。アメリカで見られるような研究者とインタープリターとの連携の必要性を以前から唱えていた小林にとって、これら岐阜での経験はよいきっかけとなった。その後も「傷病鳥獣救護を起点とする環境教育のあり方について」と題して岐阜大学の救護センター主催のセミナーでスピーチもしている。

獣害問題をはじめとする人と野生動物との軋轢や、人と野生動物との距離感のズレ、おかしな野生動物観など、人と野生動物をとりまく様々な問題を予防・解決するためには、野生動物を素材にした環境教育の普及や、そうした社会問題を扱えるインタープリターの育成が必要であると考えていた。その意思は、2006年に京都で開催された「第5回東中国クマ集会」での講演[20]や、2012年、NPO法人日本エコツーリズムセンターと連携した「野生動物インタープリター研修会」の立ち上げにも現れている。これは日本初の試みであると同時に、小林の原点である「野生動物」と「インタープリテーション」がまさしくつながる活動でもあった。

帝京科学大学時代：
インタープリターの資質の向上と社会的な役割の普及、地位の確立をめざして

■大学でのインタープリテーション教育体制の構築

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科は動物との共生を理念とし、2002年の開設当初から動物介在教育や動物関連施設での活動、自然体験活動の実施などの課外活動が盛んであった[21]。こうした活動を通じてインタープリテーションを実践する学生が相当数いたことから、インタープリテーションの基本的な考え方や理論を整理し、実践を通して技術や技能を系統立てて修得する機会を希望する機運が高まっていた[22]。このような背景のもと、環境教育やインタープリター養成に関する教育と研究の担当教員として、2010年4月に小林を教授として迎えた。同時に、インタープリテーションに対する一般的な理解は発展途上であり、小林は学内外を問わず、その資質の向上と社会的な役割の普及、地位の確立などの課題に取り組んだ。

小林が担当した授業は、環境教育概論、地域環境計画論、景観デザイン論(以上、学部)、環境教育特論(大学院)であり、実習としてインタープリテーション、フィールドワーク(山梨県大月・東京都奥多摩)、安全管理、野鳥標識調査、動物・植物と文化を受け持った。森 美文、北川健司(株式会社アウトドアサポートシステム)、町頭隆児(有限会社オフィステラ)ら学外の関係者とも協同してこれらの授業や実習を修得することで、自然体験活動指導者(CONE)やプロジェクト・ワイルド、プロジェクトWET、プロジェクト・ラーニング・ツリーといったプログラムの指導者資格取得もできるようにカリキュラムを構成、短期間のうちに大学および大学院教育の中で系統立てたインタープリテーション教育と資格の付与ができる仕組みを整えていった[23]。インタープリテーションでは実践的に学びながら知識と技術を磨くことも必要である

ことから、帝京科学大学が推進する地域連携活動も活用し、足立区の小学校と連携した自然体験教室の指導者や自然体験活動サークルの顧問としてオン・ザ・ジョブ・トレーニングも実践していた。

■研究と資料の活用

研究面では、インタープリテーション技術や効果の検証を卒業研究指導するなど、インタープリテーション活動を経験則での評価や実施者の自己満足で終わらせず、客観的な評価・検証という側面から扱い始めたところであった。

また、膨大な蔵書やインタープリテーション教材を活用できるように、研究室の一室に資料庫を整備中であった。蔵書の分野は、図鑑、環境教育関連書籍、自然・動物・植物関連書籍、郷土誌、各地の環境教育活動報告書のみならず、話術を磨くためと思われる落語にまでおよんでいた。インタープリテーションが自然や文化の専門性だけでなく、幅広い視野を持った総合的な能力、知識が要求される職業であることを実感させるものである。入手困難な希少書籍や報告書も多く、これらの蔵書や教材を逸散、死蔵させないことが、残された私たちの責務であると感じている。

これらの動きから、小林が従来から温めてきたインタープリターのトレーニングセンター設立の構想を進めようとしていたことがうかがえる。

■学内に収まらないインタープリテーション人材育成

同時期、自然体験型活動やネーチャーツアーの隆盛、ビジターセンターをはじめ博物館、動物園、水族館、植物園などでの効果的な教育活動の実施のために、インタープリターの必要性とニーズはさらに高まりをみせていた。たとえば、インタープリターの活動の場のひとつである自然学校は、2010 年には日本全国で 3696 校が稼働中といわれ、その存在意義は黎明期、ネットワーク形成期、認知期を経て、現在は社会企業期（異分野、異業種との活発なコラボレーション・過疎を含む地域社会における新たな担い手たる小さな産業・広域、全国規模の各種ネットワーク連携）を迎えている[24)]。

しかし、規模の大きな自然学校では自前の人材養成制度を擁しているところもあるが、高等教育機関で自然学校人材の養成をおこなっているところはまだ少なく、官公庁が主管する自然学校や規模の小さい自然学校では自前の人材養成制度を擁しているところはわずかである[24)]。小林は、エコツーリズムセンターや日本環境教育フォーラム、環境省や地方自治体が主催するインタープリター養成講習・研修の指導に東奔西走、大学赴任以前にも増して積極的に人材育成活動を継続していた。

■社会貢献としての環境保全活動、災害救援活動

またこの時期に小林は、埼玉県飯能市エコツーリズム検討委員、東京都獣害対策委員、東京都シカ保護管理計画検討委員など環境保全に関わる公的機関の委嘱委員として、各地を飛び回っていた。環境教育の専門家、動物学者としての知識や豊富なフィールド体験はこうした場面で貴重な示唆を与える役割を担っていたと同時に、利害の絡む難しい会議の局面ではファシリテーターとして会議の進行を促していたのではないかと察する。これもまた、インタープリター小林ならではの活動といえるのではないだろうか。

また、小林は 2011 年 3 月におこった東日本大震災後に、いち早く学生とともに現地入りして広瀬敏通（日本エコツーリズムセンター）、佐々木豊志（くりこま高原自然学校）をはじめとする関係機関、関係者と協同して救援、復旧活動に従事した。自然学校がもつチーム力、機動力は阪神・淡路大震災をはじめ災害救援活動で高く評価されており[25)]、大規模災害時における自然教育関係者の役割について多くの実績と示唆を残した[25・26)]。

インタープリターのネットワークづくり：つなぐ人フォーラム

■国内外へと広がったネットワークづくりの活動

小林と川嶋が、全国のインタープリターの集まるフォーラムのようなことをやりたいね、と相談し始めたのは 2006 年 6 月～7 月頃だった。キープ協会で建設を計画していた新しい宿泊研修施設の清泉寮（2009 年 4 月竣工）を使った大規模なフォーラムのような催しを企画出来ないか、と当時キープ協会の常務理事だった川嶋から小林に働きかけていた。同じころ小林は米国を中心に形成されていた「インタープリター」のネットワークである NAI（National Association for Interpretation）の海外での大会（NAI International Conference 初期は Interpreting World Heritage と呼んでいた）の 2009 年か 2010 年の日本（清里）への誘致も検討していた。

そうした中、2007 年 3 月にカナダのバンクーバーで開催された「Interpreting World Heritage 2007」に小林と川嶋は参加した。その会議の最中に 1～2 年後のこの国際大会を韓国で開催する準備が進められ

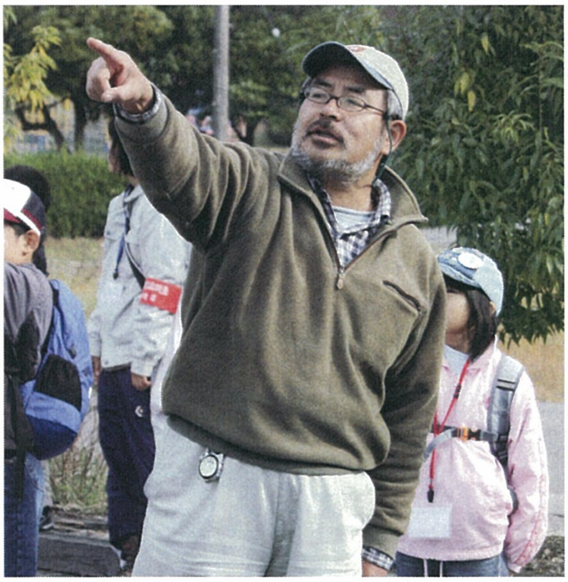

図 5.　2009 年　萩原裕作撮影
子供たちを指導する。岐阜森林文化アカデミーにて。

図 6.　2013 年　林 浩二撮影
「第 5 回つなぐ人フォーラム」の一コマ。キープ協会・清泉寮にて。

ていることを知り、その隣国である日本での 2009 年あるいは 2010 年の開催は難しいとの見通しを持った。

インタープリテーションの国際大会を誘致するにしても、まずは日本国内のインタープリターのネットワーク作りが必要であろう、という共通認識の元に、2008 年 9 月頃の開催を目指して日本国内のインタープリターが集まるフォーラムの開催を模索することになった。主催は実行委員会形式が良いであろうと様々な方々に声をかけた。自然公園や自然観察施設および自然学校のインタープリターだけでなく、博物館、科学館で活躍するインタープリターの他に、展示や広告で伝える専門家や、エコツーリズムの関係者なども加わった 16 人で実行委員会が組織され、小林が実行委員長、川嶋が事務局長となり、第 1 回つなぐ人フォーラムが 2008 年 9 月に開催された。

第 2 回つなぐ人フォーラム(2009 年 9 月 6 日～ 8 日)では、「アジア・インタープリターズ・ネットワーク」のベース作りをすることに挑戦した [27]。この年には、国際交流基金の協力を得て中国・韓国・台湾・インドネシア・マレーシアの各国のインタープリテーション事情のご紹介を頂ける方々に来日していただき、立教大学でのシンポジウム、清里でのフォーラム参加、帰国前の立教大学での会議を行った。

2009 年のつなぐ人フォーラムへの渡航費を国際交流基金から得られただけで、行政の予算も企業や助成財団の支援を得る仕組み作りも出来なかったため、2009 年 9 月以降、このアジアのネットワーク作りの動きが出来ないままでいることは悔やまれる。

つなぐ人フォーラムは 2013 年 2 月まで各年度に 1 回、計 5 回開催されている [27-29]。第 1 回～第 3 回は 9 月に、第 4 回以降は 2 月にいずれも山梨県清里のキープ協会清泉寮を会場にしており、どの回も広くつながることで様々な社会的な課題の解決に向けた働きに結びついてゆくきかっけ作りのフォーラムという役割を果たし続けている。小林は第 1 回から第 5 回までの間、つなぐ人フォーラムの主催者である「つなぐ人フォーラム実行委員会」の実行委員長を務めた。

2006 年以降、亡くなるまで、小林はインタープリテーションに関する国際会議や、アジアでの集会に繰り返し参加していた。単に海外の情報を収集するだけでなく、日本のインタープリテーションを積極的に海外に情報発信しようとする意図を持っていたと考えられる。

おわりに

現在、日本でインタープリテーションに関わる多くの人が、小林の講義やその先進的な取り組みに学んだことは間違いない。また、小林と時間を過ごした多くの人は、講義等以上に、氏自身が自然に向き合う姿勢や、物事を楽しむ前向きな姿に大きな影響を受けたように感じる。

小林は、プログラムや、インタープリターの養成において「好奇心」をとても大切にしていた。これは米国の生物学者（で作家）のレイチェル・カーソンが、著書『センス・オブ・ワンダー』[30] において表現した「神秘さや不思議さに目を見はる感性」と同質のものであろう。1980 年代以降、日本でインタープリテーションが急速に普及していく過程において、誰にも真似のできないバイタリティで仕事

に取り組み、多くの足跡を残した小林の活動は、使命感に裏打ちされたものであったであろうが、同時に自身の尽きることのない好奇心に導かれたものであったように感じる。

小林は、研修会の参加者などから著書へのサインを求められた時、しばしば以下のように言葉を添えていた。

「森を楽しめる人は、きっと人生も楽しめるはず」

小林の早すぎる逝去は多くの人に深い悲しみをもたらした。

小林 毅さんに感謝の気持ちを捧げるとともに心からご冥福をお祈りしたい。

本稿をとりまとめるにあたり、日本自然保護協会時代の活動の記述については、志村智子さん・吉田正人さん、東京動物園ボランティアーズとしての活動の記述については坂本和弘さん、鳥類標識調査に関する活動については吉安京子さんにご協力いただいた。英文抄録の作成には山田菜緒子さんに協力いただいた。本文中に名前をあげた方々以外にも、小林 毅さんと共に日本のインタープリテーションを築いてきた多くの方がおられるが、誌面の都合で割愛せざるを得なかったことをお詫びいたします。

引用文献

1. 小林 毅：インタープリテーション．日本環境教育学会（編），*環境教育辞典*，教育出版，東京，2013, pp. 18-19.
2. 小林 毅：自筆の業績録，2007.
3. *自然保護*，(221)：26, 1980. の無記名記事による。
4. *自然保護*，(235)：26, 1981. の無記名記事による。
5. ウトナイ湖サンクチュアリのウェブサイト中、ネイチャーセンターのページの中の「サンクチュアリの歴史」部分 http：//park15.wakwak.com/˜wbsjsc/011/inf/ （2014.1.24 閲覧）
6. 公益財団法人日本野鳥の会のウェブサイト中、講師の派遣のページ http：//www.wbsj.org/activity/spread-and-education/dispatch-of-lecturers/ (2014.1.24 閲覧)
7. *自然保護*，(263):30, 1984. の無記名の記事による。
8. 自然教育研究センター：*株式会自然教育研究センター業務概要(2013 年版)*, 自然教育研究センター，東京，2013.
9. 由井正昭：ビジターセンターの施設に関する研究，*千葉大学園芸学部学術報告*，31：19-29, 1983.
10. 財団法人キープ協会（編）：*平成 20 年度自然解説指導者育成事業報告書*，環境省自然環境局自然ふれあい推進室，東京，2009.
11. 古瀬浩史（編）：*CES グランドキャニオン研修報告*，自然教育研究センター，東京，1995.
12. 山のふるさと村ビジターセンター（編）：*平成 12 年環境教育活動報告書*，東京都西部公園緑地事務所，東京，2001.
13. 古瀬浩史（編），*海外インタープリター研修会 1998* 米国国立公園環境教育ワークショップ報告書，自然教育研究センター，東京，1998.
14. 自然教育研究センター（編）：*国営みちのく杜の湖畔公園環境教育ティーチャーズガイド*，国土交通省東北地方整備局国営みちのく杜の湖畔公園工事事務所，宮城県，2002.
15. 自然教育研究センター（編）：*センス・オブ・フォレスト*，高知県森林局森林政策課，高知，2003.
16. 小林 毅：*森の楽校（自然と遊ぼう 3)*，山と渓谷社，東京，2003.
17. 小林 毅：インタープリテーションの方程式，*山ふる解説員通信*，77：14, 2012.
18. 小林 毅：環境教育指導者・インタープリターのトレーニングの方法，*第 18 回日本環境教育学会大会発表要旨集*，2007.
19. 八代田千鶴（編）：*岐阜県におけるニホンカモシカとニホンジカとの種間関係の解明を目的とする緊急調査*，プロ・ナトゥーラ・ファンド第 18 期助成成果報告書，2009.
20. 小林 毅：野生動物を素材にした環境教育：*第 5 回東日本クマ集会報告書*，37 － 51, 2007,
21. 帝京科学大学創立 20 年のあゆみと展望編集委員会：*帝京科学大学創立 20 年のあゆみと展望*．帝京科学大学，東京，2010.
22. 森 恭一・花園 誠・篠原正典・石田 おさむ・落合健一・島田将喜・下岡ゆき子：インタープリテーション・ワークショップ実施報告．*帝京科学大学紀要*，8 ：193-195, 2012.
23. 帝京科学大学：生命環境学部アニマルサイエンス学科野生動物コース．帝京科学大学広報室，*2013 Campus Guide Book*, 帝京科学大学，東京，2013, pp. 23-24.
24. 広瀬敏通・梅崎靖志・中澤朋代・大西亮真：*第 5 回自然学校全国調査 2010 調査報告書*．日本環境教育フォーラム，東京，2011.

25. RQ 災害教育研究部会（編）:*BOOKLET 災害教育 2012「利他と貢献が社会を変える」*. RQ 災害教育センター , 東京 , 2013.
26. 小林 毅：東日本大震災と自然教育 *BIOCITY*, 48：104-109, 2011
27. 第 2 回つなぐ人フォーラム実行委員会・財団法人キープ協会（編）：*第 2 回つなぐ人フォーラム～自然・文化・地域・人をつなぐ～ 実施報告書*, 第 2 回つなぐ人フォーラム実行委員会・財団法人キープ協会 , 山梨 , 2009
28. 第 4 回つなぐ人フォーラム実行委員会・公益財団法人キープ協会（編）：*第 4 回つなぐ人フォーラム実施報告書*, 第 4 回つなぐ人フォーラム実行委員会・公益財団法人キープ協会 , 山梨 , 2012.
29. 第 5 回つなぐ人フォーラム実行委員会・公益財団法人キープ協会（編）：*第 5 回つなぐ人フォーラム実施報告書*, 第 5 回つなぐ人フォーラム実行委員会・公益財団法人キープ協会 , 山梨 , 2013.
30. カーソン , レイチェル（上遠恵子訳）：*センス・オブ・ワンダー*, 新潮社 , 東京 , 1996.

小林 毅と日本のインタープリテーション 年譜

	小林　毅		日本のインタープリテーションに関連した出来事
	活動など	著作など	
1934 年			日本で最初の国立公園が誕生 中西悟堂らによる初めての探鳥会
1950 年			自然に親しむ厚生運動 （国立公園で解説活動始まる）
1951 年			日本自然保護協会　設立
1957 年	茨城県日立市にて出生		自然公園臨時指導員制度制定（後に自然公園指導員に名称変更）
1964 年			日本でビジターセンターの整備始まる（尾瀬、日光など）
1974 年			富山県がナチュラリスト（自然解説員）制度開始。地方自治体としては始めての取り組み 東京動物園ボランティアーズが誕生 初の長距離自然歩道として東海自然歩道完成。
1975 年			弥富野鳥園（愛知県）開園 （鳥類の保護や教育普及をテーマにした施設）
1977 年			しれとこ 100 平方メートル運動スタート
1978 年			第 1 回自然観察指導員（養成）講習会（1978 年 7 月、神奈川県で開催された。）
1979 年	東京動物園ボランティアーズ 5 期生として登録（～ 1983 年）		
1980 年	日本自然保護協会の知床自然教室にボランティアとして参加し、子どもを対象にした長期自然教室の指導を開始		
1981 年	茨城大学農学部畜産学科卒業(動物行動学専攻) 日本自然保護協会の第 22 回自然観察指導員講習会受講		日本野鳥の会、ウトナイ湖サンクチュアリ開設。
1982 年			東京都高尾ビジターセンターが再建され（1978 年に火災で焼失していた）、日本自然保護協会職員が常駐しての解説活動開始

1983 年	(財) 日本自然保護協会　嘱託研究員となり、東京都高尾ビジターセンター勤務		
1984 年	(財) 日本自然保護協会　研究員となる 東京都御岳インフォメーション・センターに勤務 観察会行事「カモシカウォッチング」スタート		
1985 年			国立公園パークボランティア制度開始 自然観察の森整備開始
1986 年	北海道根室市での子どもの長期自然教室 「ニムオロ自然教室」開始 (第 18 回まで担当) 山形県自然博物園　基本設計調査		
1987 年			第 1 回清里フォーラム (後に清里環境教育フォーラムに改称) 開催
1988 年	太白山自然観察の森基本計画 自然保護協会を退職 (7 月) ネイチャーセンター研究会　発足		
1989 年	自然教育研究センター (任意団体) 設立		
	自然公園利用の在り方検討小委員会答申 (インタープリテーションの重要性を強調)		
1990 年	自然教育研究センター、株式会社に組織変更 職員の OJT 担当として奥多摩ビジターセンター等に勤務 東京都山のふるさと村ビジターセンター開館 初代の解説スタッフを務める 鳥類標識調査者　資格取得 インタープリテーション研究会　発足		日本環境教育学会発足
1991 年	環境庁 (現環境省) 自然解説指導者育成検討委員		環境庁自然ふれあい推進室設置
1992 年	環境庁 (現環境省) 自然解説指導者育成事業の講師を担当 (1992 年 ?2008 年) インタープリター・トレーニング・セミナー開始 葛西臨海公園鳥類園展示設計	東京都におけるニホンカモシカ、文化財の保護　24 巻、東京都教育委員会 東京都小峯ビジターセンター映像ソフト作成	
1993 年		こどもと環境教育 (部分執筆)、東海大学出版会 (1993)、140-157 ページ 環境庁　自然解説指導者養成テキスト (部分執筆)	
1994 年		山のふるさと村ビジターセンターマルチスライド作成 東京に生息する日本カモシカの分布、小林毅、東京都の自然、20 巻・23-24 頁	
1995 年	日米インタープリタートレーニングセミナー開始 山のふるさと村ビジターセンター展示施設等改修基礎調査 日本インタープリテーション協会を発足させる 自然ふれあい施設における指定管理者制度による管理運営のあり方検討業務 (環境省請負) を受託	立川の歴史と風土第 1 集　みちくさミュージアム (野草編) (編集)、立川市教育委員会	自然公園等における自然とのふれあい確保の方策の答申
1997 年	環境省環境研修所における都道府県自然保護担当者研修、自然保護官初任者研修などを担当 アニマルウォッチングスクール開始 インタープリターズ・フォーラム開始 (1997 ～ 2006 年)	動物観察マップ関東版 (共著)、日経サイエンス社 (1997) 野外教育指導者読本 (部分執筆)、文部科学省	

1998年		奥多摩自然ハンドブック（共著）、自由国民社 地域生物自然活用辞典（部分執筆）、農村漁村文化協会	東京ガス環境エネルギー館開館
1999年	平成11年度山のふるさと村報告書にて、ティーチャーズガイドに取り組む		
2000年	ティーチャーズ・ワークショップ開始 （2000～2006年） 国営みちのく杜の湖畔公園指導者研修 （国土交通省） プロジェクトワイルド・ファシリテーター上級指導員　取得	日本型環境教育の提案（部分執筆）、小学館	
2001年	JICA専門官短期派遣（ベトナム・環境教育）	裏磐梯自然体験プログラム　インタープリターズ・ガイド　制作	日本科学未来館開館
2002年	北海道教育大学社会教育主事研修会講師担当	みちのく湖畔公園環境教育活動ティーチャーズ（編集） 中学校での「総合的な学習の時間」に役立つ自然体験アクティビティ集　（社）日本環境教育フォーラム発行　（作成協力・原稿執筆）	
2003年	国立科学博物館附属自然教育園　自然保護講座講師 動物園における生涯学習検討委員	森の楽校、山と渓谷社（単著） 「おとなの自然塾」（部分執筆）、岩波アクティブ新書 ファシリテーター・トレーニング（部分執筆）、なかにしや出版 ホリスティック教育ガイドブック（部分執筆）、せせらぎ出版 高知県森林環境教育ティーチャーズガイド「センス・オブ・フォレスト」（編集）	
2004年		高知県森林環境教育ティーチャーズガイド「センス・オブ・フォレスト2」（編集） 身近な自然を活用した環境教育ティーチャーズガイド　環境省発行　（監修）	ストップおんだん館開館 （2010年閉館）
2005年			愛・地球博（愛知万博）
2005年	東京都シカ保護管理計画検討委員、東京都（環境局）（2012年まで）		
2006年	岐阜県立森林文化アカデミー　教授就任 NAI National Workshop (Albuquerque, US) 参加 Interactive interpretive activities in Japan.（発表） 1st Interpreting World Heritage- NAI International Conference (Puerto Rico, US) 参加		
2007年	2nd Interpreting World Heritage- NAI International Conference (Vancouver, Canada) 参加 Trends of itnterpretation in Japan.（発表）		

2008年	The 4th Conference on Education for Sustainable Development (at Beijing, China) 参加 International Conference on the Development of Nature Center--Let's Learn from Each Other (Taipei, Taiwan) 参加 Development and Operating Nature Center in Japan (発表) 3rd Interpreting World Heritage- NAI International Conference (Sokcho, Korea) 参加 Regeonal Culture and Utopian Ecological Society (Suncheon, Korea) 参加 Educational interpretation _How to develop educational effect (発表)		第1回つなぐ人フォーラム開催
2009年	つなぐフォーラム実行委員長、以降2013年の第5回つなぐ人フォーラムまで毎回実行委員長 韓国環境教育ネットワークのインタープインテーション大会 (済州島) 参加 飯能市エコツーリズム検討委員 (～2012)	科学的な心を育てる環境教育プログラム、生物教育、岐阜県高等学校生物部会 Vol.53 (2009) 岐阜県におけるニホンカモシカとニホンジカと種間関係の解明を目的とする緊急調査報告書 (部分執筆)	
2010年	帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 教授就任 東京都獣害対策委員、東京都 (産業労働局) (～2012)		
2011年	那須平成の森アドバイザー就任		
2012年	野生動物インタープリター初級、中級研修会、NPO法人エコツーリズムセンター 自然学校指導者養成講座講師、公益社団法人日本環境教育フォーラム NAI International Conference (Kailua-Kona,US) (参加) Interpretation to help recover and restore from the tsunami disaster in Japan _ Implications from a view of outdoor education and environmental education. (発表) 1st Asian Interpretation Forum - AAHI (Seoul, Korea) 参加 The current issues of interpretation in Japan from non-public perspectives. (発表) 東京都ニホンカモシカ保護委員 里山の利活用検討委員 (林野庁)		
2013年	3月13日、逝去 (享年55歳)		